修身教育で使用された例話についての一考察
―明治二十三年瑞井尋常小学校第一学年と第二学年に焦点をあてて―

One consideration about illustrative stories used by Shusin Education
―On the first grade and the second grade of Mizui Jinjoshogakkou in1890―

島﨑美奈*

SHIMASAKI Mina*

論文要旨

本研究の目的は， 修身教育で使用されていた例話を繙いていくことで，例話の特徴および、例話を使用した意図を明らかにすることである。学校現場で実施されていた修身教育の詳細な姿を知るために，淡路島にあった瑞井尋常小学校の課程日誌『表第二四号ノ壱　第一年生課程日誌　瑞井尋常小学校』と『表第二四号ノ弐　第二年生課程日誌　瑞井尋常小学校』の二冊の史料を使用することとした。その史料に基づき，瑞井尋常小学校第一学年と第二学年の修身教育のなかで使用された例話について考察した。

1. 瑞井尋常小学校の背景

まず，実施されていた修身教育を知る前に，学校に通っていた児童の生活背景を課程日誌から読み解くこととする。

使用する瑞井尋常小学校の課程日誌[1]『表第二四号ノ壱　第一年生課程日誌　瑞井尋常小学校』と『表第　二四号ノ弐　第二年生課程日誌　瑞井尋常小学校』は和とじで製本され第一学年の表題には「表第二四号ノ壱」，そして第二学年の表題には「表第二四号ノ弐」（図1）と表記されている。そして『日誌』には，日付，教科目名のあとに，要摘の欄が設けられている。

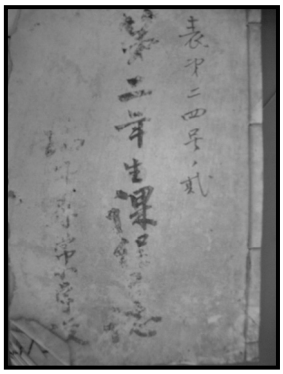

図1　『表第　二四号ノ弐　第二年生課程日誌　瑞井尋常小学校』

日誌の最初の日付は共通して，「明治二十三年四月一日火曜日」である。そして最終日は，第一学年が「明治二十四年三月三十一日火曜日」，第二学年は「明治二十四年三月二十七日金曜日」である。なぜ第二学年の日付が，三月二十七日までしか記入されていないか，という疑問がわくが,その理由は不明である。しかし，両史料とも，記入された最終日付以降の用紙はすべて白紙である。そして，日誌の表題に,共通した「表第二四号」とあることから，師は年度ごとに，日誌を新調していたと推測できる。つまり，瑞井尋常小学校では,学年の始まりを四月一日，終わりを翌年三月三十一日としていた可能性が高い。

また，日誌には，月曜日から土曜日まで記入されている。しかし，日曜日の記述はないことから，休業日は日曜日である。さらに，八月一日から八月三十一日までの日付はなく，その期間を夏期休業としていたのであろう。そして，十二月二十四日の要摘の欄に「明日ヨリ冬期休業」と記述され,次の日付は，明治二十四年一月八日となっていることから，冬季休業は，十二月二十五日から一月七日であることがわかった。

また「日誌」の要摘の欄には，太陰太陽暦と太陽暦の種類の暦が記述されていた。太陽暦は，明治五年に政府によって規定された。そのため，明治に入り，祝祭日となった神武天皇祭，秋季皇霊祭，そして紀元節などは，必然的に太陽暦を使用しているのである。しかし，「四月二十一日月曜日　本日ハ旧暦三月三日ニテ出席生僅少十二名且ツ十二時ヨリ早引キセシヲ以テ習字科欠グ」，「五月二十六日月曜日　本日旧四月八日釈迦ノ誕生日故カ出席生僅少且ツ正午ヨリ早引ニ付復習及欠課ス」，そして「二月七日土曜日　本日ハ陰暦十二月末ノ為メカ出席生ナク授業セズ」と記述されているように，そこでは，太陽暦で示され，要摘の欄には,太陰太陽暦の日付がさらに記載されている。これらとは，記述の仕方が異なっているが,「九月二十四日水曜日　本日ハ旧社日故カ出席生僅少且ツ午前十時ヨリ早引ニ付欠科アリ」と，行事名に「旧社日」[2]と補足されている。この四月二十一日，五月二十

＊ 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻（Mukogawa Women’s University Graduate School of Education）

六日，九月二十四日，二月七日は，通常通りに授業があるにも関わらず，生徒がほとんど出席していない。つまり，時代が明治に入り,時代の流れに応じて太陽暦を使用している家庭もあるが，まだ，大半の家庭では，太陰太陽暦を使用しているのである。

つまり，当時の学校現場では，太陽暦を使用した暦で授業が実施されているが，学校の外に出てみると，地域や家庭では，太陰太陽暦を使用する習慣が残っていた。

政府は，家庭で，太陰太陽暦を使用する文化が残っていたとしても，学校現場では，太陽暦を使用することを進めた。ここから，政府が児童を将来，欧米の文化にも適応する人材に育成しようという意図から,教育内容の改革だけではなく，形式面からも改革しようとしたことがうかがえる。学校が整備されることで，明治政府の意図が介入し，そのため児童の生活や風習のなかで,暦に差が生じていたのである。

瑞井尋常小学校では,学年を四月一日から翌年三月三十一日とし，月曜日から土曜日まで学校が実施され，休業日は日曜日，そして，神武天皇祭や秋季皇霊祭などの祝祭日である。さらに，伝統的に地域や家庭が祝ってきた行事は，江戸時代からの太陰太陽暦を使用しているといった実態が明らかとなった。

２．使用された例話の内容

瑞井尋常小学校の修身教育では，ひとつの事柄を教授するさい，その事柄に適した具体的な例話を使用している。例話を使用することで，教授内容がより具体的になり，同時に理解が容易になるという効果がある。使用された例話は日本の話だけとは限らず，また，現実的な内容や空想的な内容とさまざまである。当時の児童は，地域の伝統的な民話や伝記を聞く程度であった。そのため，教師が授業のなかで話す例話は興味深く，魅力的なものであったにちがいない。そして,教師側も力を入れて，例話の選出にあったのであろう。

瑞井尋常小学校の第一・第二学年で使用されていた例話をみると日本・中国・西洋に分けることができる。本研究では,使用されたすべて例話を解読することは難しかった。各地方の民話や世界の伝承などを参考に調査したが，例話の内容を明らかにできなかったものがある。そのため，本研究では，話の内容を明らかにできた下記のもののみ記述することとする。

(1) 日本の例話

①　窮楽

明治二十三年六月九日の第一学年で「長上の人を尋ねるとき，常に丁寧な態度でいること」について，亀田窮楽(?-1758)を例に出し,教授している。

窮楽については，現在あまり知られていない。窮楽が登場する話は，茶売翁(ばいさおう)(1675-1763)との交友の話が有名である。翁が，洛西双々丘に留まり，茶店を開いたが，ちょうど梅雨の時期で，連日，雨だった。そのため客は途絶え，翁が毎日食べる米にも困っている，といううわさを耳にした窮楽は，米銭を携えて翁のもとを訪れ，翁を救ったという話である[3]。金銭を貸しても，その人の窮地を救ったことを鼻にかけ，自分より目上の人に対して,丁寧な態度で接することを説いている。

②　山崎闇斎

明治二十三年七月二十五日の第一学年で「人生を送って無用な人とはならないようにするべきであること」について教授している。

山崎闇斎(1619-1682)は京都に生まれ，はじめは延暦寺で僧侶となり，そして妙心寺に移った。土佐藩侯に才能を評価され，野中兼山の推挙により高知の吸江寺に移り，谷中時について朱子学を修めた。闇斎は，強烈放胆な性格であり，よく他の門下生と論争していたようである。のちに土佐を追われ,京都へと帰り，門弟を集め私塾を開き，教育者となる。そして，朱子学の「大極図説」を日本書紀の神代記に付会させ,独特の習合思想を確立したである。さきに述べたように闇斎の性格は，強烈放胆であったため，教育者となってからも，よく門弟と論争し，破門させた者も少なくないといわれている[4]。

人生を通して人と対立をしてまでも，自分も信念を貫き通す生き方の一例として山崎闇斎の話を使用している。

③　メジロ

明治二十三年九月二十六日の第一学年では，「大人数で席につくときの心得」にメジロを例話に教授している。メジロは児童にとって身近な動物である。メジロのある習性を例にあげて，「大勢で席につくときの心得」を説いている。

メジロの習性は,睡眠時に群れ全体が一列をなし，枝にとまる。とくに夕暮れになると,その列にわれさきにと割り込もうとする姿が観察することができる。

このように一列に整列することを児童に伝えるために，メジロの習性を例話として使用した。

④　松平好房

明治二十三年十一月二十四日の第一学年で「孝行」，そして明治二十三年十一月十二日の第二学年で「父母に仕えることは自分の心を安心させる」ということについて，松平好房(1649-1669)の話を使用

している。

松平好房は，明治六年，上羽勝衛によって編纂された『勧孝邇言』や，国定教科書時代の修身教科書にもたびたび登場する人物である。

松平好房は，四・五歳で文字を知り，常に父母がいる方向には足を伸ばさなかった。外に出るときは必ず自分が行く所を父母に伝え，帰宅したときも父母に告げたそうである。そして，珍しい品が手に入ったときには父母に見せ，父母がその品を手にしたときにはおおいに喜んだと云われている。また，父母から物を貰ったときには，丁寧にお礼を伝え，そしてその品を愛し，失くすことは決してなかった。自分が病気で伏せていても，見舞いに来たとわかると床から起き上がって話しを聞いた。さらに，父母が病気で床に伏せていると，その側を離れず，薬は自分が必ず先に舐めて，異常がなければ父母に勧めたそうである。

これらの行動から，松平好房が親のことを敬い，孝行していることがうかがえる。松平好房の親に対する模範的な姿を児童に教え，孝行の概念や行動を教授したのである。

⑤　お富の友愛

明治二十三年十二月五日の第一学年で，「兄弟が互いに災難にあったときには助けあうこと」について教授している。そこで使用されている例話が「お富の友愛」である。お富の友愛とは，歌舞伎世話物のひとつである『与話情浮名横櫛（よはなさけうきなのよこぐし）』，別名『お富与三郎』である。授業の例話として，歌舞伎を出すとは意外であるが，その話のあらすじは，以下のとおりである。

江戸の大店の若旦那であった与三郎は木更津であったお富に出会い，一目ぼれをする。ところがお富は赤間源左衛門の妾であった。情事は露見し与三郎は源左衛門の手下にめった斬りにされ，海に投げ捨てられた。それを見て逃げ出したお富は手下の海松杭の松に追われて入水を図る。ところが二人とも命をとりとめ，お富は和泉屋の大番頭・多左衛門の妾宅に引き取られ，与三郎は実家を勘当され，三十四箇所の刀傷の痕を売り物にした「切られ与三郎」として悪名を馳せることとなる。ある日，与三郎はごろつきの蝙蝠安とともにお富の妾宅に強張りに来る。片時もお富を忘れることができなかった与三郎は、お富を見て驚くと同時に,またしても誰かの囲ものになったかと思うと肝が収まらない。恨みと恋路を並べてたてる台詞があり，やがて多左衛門は与三郎のとりなしで二人は金を貰って引き上げる。その場を切り抜けるためにお富は与三郎を兄だと言いつくろったのだったが，実は多左衛門こそがお富の兄であり，多左衛門は全てを承知の上で二人の仲をとりもとうとしていたという話である[5]。

この例話は，さきにも述べたように，歌舞伎の話の一節であり，現在でもよく演じられている。しかし，その内容は，児童が知るには少々過激ではないだろうか。現在でも，その時代に流行している内容を授業に取り入れるなどして授業を盛り上げていることから，明治でも，同様に,教師が当時,社会で流行している内容を使用したとも推測できる。

この例話を通して災難にあったときは兄弟が互いに助け合うことを教授したのであろう。

⑥　重成の兄

明治二十三年十二月八日の第一学年で「友愛」について「重成の兄」を例話に教授している。

重成の兄とは，島原藩主の鈴木重成（1588-1653）の兄，鈴木正三（1579-1655）のことである。鈴木正三は，江戸時代初期の曹洞宗の僧侶である。

鈴木重次の長男として生まれるが，四十二歳のときに家督を弟の重成に譲って出家している。重成は，正三を兄として慕い，出家したのちは，友として慕っていた。そして島原の乱の後に天草の代官となった弟が「天草をよくするためには，まず人々の暮らしを落ち着かせなければならない」と考え，村を起こすために自治を仕組み，建て直しを諮る策として，兄である正三を呼んだのである。策とは，僧侶である正三が民間で仏教の教えを説き,再布教することで，仕事に精が出て，さらに人々の心が落ち着くように努めたのである。そして，この兄弟の働きが，天草復興の基盤となったのである[6]。

この話をするとこで，兄弟間の絆の強さや兄弟，そして友として協力することの素晴しさを教授している。

⑦　森蘭丸

明治二十四年三月四日の第一学年で「正直にするべきであること」について森蘭丸（1565-1582）の逸話を使用している。

織田信長（1534-1582）が近習たちに鍔に菊をあしらった刀を見せ，その菊の数を当てた者に刀を与えると言った。家臣が次々と答えるなか，蘭丸だけは黙ったままであった。そこで，信長がその訳を尋ねると，信長が用を足す間，刀を持って待つ際に，数を数えて知っているからだと言った。その正直さに感心した信長は，その刀を蘭丸に与えたという逸話である[7]。

正直な言動は，人に幸福をもたらすということを

諭し，児童に正直な人間になるよう促したのである。

(2) 中国の例話

① 李白

明治二十三年七月二十一日の第一学年では「何事も怠けず勉強すること」について，李白(701-762)を例に教授している。

李白は中国最大の詩人の一人である。李白は，当時の唐代詩人のなかでは珍しく，科挙の試験を受けていない。しかし，彼は，自らの才能を自負し，自分は必ず重要視される人物になること，そして政治の世界でその能力を発揮できると信じ，学び続けていた。そして四十三歳の頃，都である長安に登り，玄宗(685-762)に召され，天使の側近となったのである。都を退いたのちは，中国各地を巡り，さまざまな詩を作り,現在の「詩仙」と呼ばれる地位を築いた[8]。

李白が幼少のころから，詩文に親しみ，その才能を開花させたことを例話として児童に紹介し，何事も怠けず，勉学に励むことを説いている。

② 勧学

明治二十四年一月十九日の第二学年で，教授された内容が「勧学」についてであった。これは，中国の戦国時代末の儒学者である荀子(紀元前 313－紀元前 238)が『荀子』の最初に「勧学編」で学問の必要性･目的・方法・効果について述べている。荀子は，学における究極の目的は「天見其明，地見其光，君子貴其全也。」と，天はその光明さを表し，地はその広大さを表しているからこそ偉大なのであり，君子は身に学問を全く尽くしている事を貴ぶのであると説いている9。そのためには，学は大いに慎むべきであり，正しい方法によって正しい方向に修為し，教育本来の目的達成のために努力するべきであることを強調している10。

児童にどのように荀子の学に対する考えを教えたのかは不明であるが，荀子が「勧学」で説いた学問の必要性を児童に教授したのであろう。

③ 仲由

明治二十三年七月二十三日の第一学年と同日の第二学年で「教養するべきこと」について，仲由(紀元前 543-紀元前 481)を例に出し，教授している。

仲由は,孔子(紀元前 551-紀元前 479)が書いた『論語』の中で，多く登場する人物である。訳者によって仲由を「季路」や「子路」と称しているものがあるが，それらはすべて仲由のことである。ちなみに，作家の中島敦は，孔子と子路の話を『弟子』(1943)という作品にしている。『弟子』のなかで子路は，ぼさぼさ頭で，頭の両側の毛が上に突き立ち，低くかたむいた冠，そして労働や戦闘のときに便利なよう，うしろの袖を短くした衣を着ており，その表情は血色のいい，眉の太い，眼のはっきりした，見るからに精悍そうな青年だが，どことなく愛すべき直さが現れている人物として表現されている。子路はよく孔子に実際的な考慮が足りないと叱られているが，子路のことを嫌っていたわけではない。欠点だらけではあるが,愚かではなく，長剣を好み，すばやく，荒々しいこの弟子を高くかっているのである。子路の性格は,物事をとらえるさいに，形から入っていくことが容易にできない性格である。しかし，学問に関しては，心から納得がいかないものを表面上だけで理解や納得することはせず，遠慮なく孔子に反論していたのである[11]。子路のように性格が，軽率で欠点はあるとしても，学問に熱心に励むことで，教養を身につけられることを教授している。

④ 孟子

明治二十三年九月十九日の第二学年では「孟子」について教授されている。

孟子(紀元前 372－紀元前 289)は戦国時代中国の儒学者である。孟子は，性善説を主張し，仁義による王道政治を目指した人物である。彼に関しては多く逸話があり，『日誌』には具体的にどの逸話かを特定することはできない。しかし，孟子が児童と同じ年齢のときに行った逸話を教え，児童の関心を高めた例話と仮定すれば,孟子の逸話でも有名な「孟母三遷」と「孟母断機」の二話を使用したのではないだろうか。

最初に「孟母三遷」についてである。孟子の家は墓場の近くにあった。孟子は遊びで埋葬の真似をするので，母は市場の近くに転移した。しかし，そこでも孟子は,商人のかけ値売りの真似をして遊んだのであった。母は子どもの教育にはその場所が不適切であると考え，再び転移した。次は学校の近くであった。孟子は，学校に来る学生たちを真似し，礼儀作法を真似し遊んだと言われている。この話では教育における環境の重要さを説くときによく使用される[12]。

二つ目は「孟母断機」である。孟子が成長し，遊学を終えて故郷に帰ってきたときの話である。ちょうど母は機(はた)を織っていた。織りながら孟子に対して「どれくらい勉強できたか」と問うと，孟子は「前と同じで変わったことはない」と答えた。すると母は織りかけのはた糸を断ち切ったのである。布を織

るとき，あらかじめ縦糸がかけられ，横糸をあみかけていくが,その基礎となる縦糸を断ち切ってしまうと,布は完成しない。母は「学問をやめることは，今この縦糸を断ち切ったようなものであり，完成の見込みはない。」と説いた。これを聞き,孟子は再び，学問の基礎を学び始めたと言われている[13]。

この二つの逸話を児童に聞かせ，児童の学問に対するやる気を起こさせたのだろう。もしくは，政府が推進していた儒学の代表的な学者として児童に教授したのかもしれない。

⑤　富弼の度量

「人の告げ口を信じて怒るべきではないこと」について，富弼(1003-1083)を例とし教授している。

富弼は，契丹との外交交渉で活躍した人物である。宋は契丹から領土割譲を迫られていた。その時代の宋では，西夏の離反や財政赤字の増大などの諸問題が国内で噴出しているときであり，契丹に対して差別的な意識を持っていた。そのため，契丹の交渉に応じようとはしなかったが，ついに交渉を迫られた。そこで宋は，富弼を交渉人として遣わせ，契丹の使者蕭英と共に契丹へと赴くのである。その道中に，富弼は蕭英に対し「道中は長いので酒でも飲みながら楽しく行きましょう」と申し出たのである。そのことばを聞いた蕭英は驚いた。異民族である自分に対し，このように接してきた人物はおらず，むしろ差別的に接する宋に対し激怒していたのである。さらに富弼は続けて「恥ずかしいことですが，私は契丹のことを何も知らないので教えていただきたい。」と正直に言ったのであった。蕭栄はその態度に感激したのである。契丹は当時，異民族扱いを受け，差別されていたが,この富弼はそんな扱いをするのではなく，礼を持って接したのである。この態度により，なぜ領土を必要としているのか互いに意見し合い交渉がまとまったという話である[14]。

民族や風習が異なることを理由に差別し，さげすむような態度で接するのではなく，相手に心を開き謙虚に，して礼儀を持った態度で接することで相手の信頼を得ることができる。また他人から言われているうわさや態度を見て怒るのではないということを説いている。

⑥　孫叔敖

明治二十四年二月二十五日の第一学年では「自分の欲ばかり求める偏人に施さなくてもよい」ことについて，孫叔敖(生没年不明)の話をしている。

孫叔敖は中国春秋時代の楚の令伊であった。彼は，荘王に使え楚の富国強兵を成し遂げ，荘王に天下覇権を握らせた人物である。死の直前，息子を招き「王は私の死後に多くの領土を褒美としてくださるだろう。しかし，寝丘のみを受け取るように」と厳しく言い残したのであった。普通ならば一族の繁栄のため多くの領土を貰うのだが，彼は楚のなかでも最も土地が痩せている寝丘を貰うように言ったのである。息子は言い付け通りその土地を王から貰ったのである。

そののち，楚は乱れ国内で闘争が起き，領土の奪い合いが起きたが，一族の土地は奪い合いの的にはならなかった。そして呉が侵略してきた際も，名前が不吉であるという理由から攻められることはなく，子孫は多いに栄えたそうである[15]。

孫叔敖は，私欲である自らの財産を増やすことを求めるのはなく，何が本当に必要なものであるかを考え，私欲のために行動はしなかった。授業の中では「自分の欲ばかり求める偏人に施すことはない」という例話で使用している。

(3) 西洋の例話

①　狼と羊を捕まえる話

明治二十三年五月二十一日の第一学年では「狼と羊を捕まえる話」と記述され，「人が虚言を言ってはならないこと」を教授するために例として出された話である。

> 村近の野に畜付たつ羊の番をする牧童。毎日見張ばかりゆえ退屈して。一日不図狼ダ狼ダあるくと。村中のものどもが聞つけて。四方より駆集まり。空に大騒動したるを見て。至極面白事と思ひ。夫より後は二度も三度も同じ騒を仕出しては遊びけり。然るに或日真に狼出来りたれば。牧童大に仰天して。大声揚てかけまはり。一生懸命に加勢を呼べども。村のものは耳にもかけず。又例の戯謔だと一向に出合ねば。数多の羊一疋も残らず皆狼に喰れけるとぞ
>
> 平常虚言を談ものは。緊要時に実事を云ても。決して信ぜられぬものぞ。児輩よ虚言をつくまいぞ[16]

この話は子ども向けの絵本として数多く出版されている現在では有名な話である。「狼が来たぞ」と嘘をつき，村の人々を困らせていた羊飼いの少年が,本当に狼が来たときには村の人々は誰一人として助けてはくれなかったのである。嘘をつくことで，人から信用されなくなり，その嘘によって自分自身が最終的に苦労することを児童たちに教授し

ている。

② 梟と鳩

明治二十三年五月二十三日の第一学年では「梟と鳩の話」が教授され,多言を慎んでいる人は，他人から恨みをかわないという例として話されている。

だからこそイソップがこんな話も作ったのだと思う。

梟は賢い鳥だったので，柏の木が初めて生え出ようとする時，生やせてはならない，何としてもやっつけろ，と鳥たちに忠告した。柏からは鳥が絡めとられて逃げられなくなる薬，鳥もちが作られるぞ，というのだ。次に，梟は，人間が麻を植えている時，その種をほじくり出せ，と命じた。生えて来たら碌なことにはならぬ，というのだ。三番目に梟は弓を持つ男を見て，その男は自分では地を行くが飛び道具を放つから,と。

鳥たちはその言葉を信じないばかりか，梟を阿呆扱いし気が変だと言いあった。しかし，後に，痛い目に遭ってからは梟を賛美し,最高の知恵者だと認めた。それ故，梟が現れると，物識りさんの所へといって皆が寄って来るのだが，梟はもはや何ひとつ忠告はせず，ただ嘆くばかりだ。[17]

この話は，現在ではあまり知られていない。この話を用い，多言を慎んでいる人は他人から恨みをかわないということを説いたと『日誌』には書かれているが，話の内容からすると二点のことが考えられる。一つ目は賢いと言われている人の話には耳を傾けることである。二つ目は賢い人に頼りすぎず，自らの力で解決策を試案する努力をすることである。しかし，当時の教師は多言を慎んでいるひとは恨みをかうことがない，ということをこの話を用いて教えた。

③ アルフレッド王

明治二十三年六月二十日の第一学年で「学芸を上達しようと思えば,勉強するべきであること」について，「アルフレッド王」の話を使用している。

アルフレッド王（Alfred Great,849-899）はイングランド七王国のウェセックス国王である。ウェセックス王国はイングランド東部のデーン人から攻撃を受けていたが，878 年にアルフレッド王がエディントン付近で破り，ウェドモーアの和議で休戦している。海軍創設などの軍制改革を進め，886 年にデーン人からロンドンを奪還した。しかし，892 年に再度デーン人が来襲すると 4 年にわたり交戦し，攻撃に成功している。彼らの勢力範囲をイングランド東部にとどめ，イングランド統一の基礎を築いた人物である。このように，政治的な偉業を成したほかに，ラテン語の文献を翻訳するなど学芸振興にも力を注いだことでも有名である。子弟の教育にも力を入れ,多数の学者を招き，自らラテン語文献をアングロサクソン語に翻訳もした。今までの諸国の法典を集大成した「アルフレッド法典」を編纂や，行政の整備にも尽力を尽くしており，裁判制度や罰則の強化により治安も向上し，旅人が落とした財布が月末になってもその場所に落ちたままであったという逸話がある。アングロサクソン時代最大の王とも称されている[18]。

ただ国を治めるだけではなく，自らもラテン語を翻訳し，日々勉学に励んでいたことから，どんなに業績のある人物であっても，勉学を怠らないということを児童たちに説いたことが考えられる。

④ 牙をとぐ猪

明治二十三年六月二十五日の第二学年「牙をとぐ猪の話」では，「日ごろから勉強をすることが肝心であること」についての例として出された話である。

野猪が松の幹へ牙を摩擦で磨てゐる時。狐傍を通りかりしが声を掛て。狐「ハテ。足下は何をしなさる。猟師も来ず犬も見えず。とんと危殆のないのに」といへば。猪ふりかえつて。「左様サ。雖然騒動が始てからは。私ァ牙を磨より他に用が種々あります

剣ヲー抜ィ」といふ喇叭が鳴てから。剣を磨ぎ初ては遅緩じや[19]

上記のように，イソップ寓話は小学校「修身」の授業の中で採用されており，この話を用い，勉強は日々の積み重ねが大切であることを児童に説いている。

⑤ 猫と鶏

明治二十三年七月十一日の第一学年で「何事も嫌われないようにすること」について，イソップ寓話のなかに含まれている話をしている。

或鶏病で塒につくと。猫親切に見舞にきて。枕頭へするより。ねこ「足下。尊恙は如何で御坐ります。なんぞ御用があるならいたしましせう。なにか御入用の物でもありますか。

なになにとも世間にあるものなら。私が持て参りませう。御遠慮なくそうおつしやりませ。イヤ

サ決して御騒ぎなさるな。落付て御出なさい」といへば。にはとり「有難御坐ります。私にはドウモ足下の御心配下さらぬが。一番好御坐ります。
　来てもらひ度もない客人は。別辞の時に。イヤよく御帰んなさるといふわけじや[20]

このように猫と鶏は昔から仲がよくない動物として表されている。たとえどんなにその人のことを心配していたとしても，元から嫌われるような行為をしていると，信用されなくなり，嫌われてしまう。そのため，この話を用いることで，児童に人に嫌われないようにという心構えを説いている。

⑥　兎と亀

明治二十三年七月十四日の第一学年で実施された「兎と亀の話」では，「何事も勉強に励んで怠らないようにすること」を教授するために出されて話である。

　兎。亀の行歩の遅きを笑ひ。愚弄して「コウ。ここへ来や。競争をしやう。乃公の足は何でも来ると思ふゾ」と威張れば。亀は迷惑には思えど一ツ処へおし並び。サアと云れて寸分も猶予せず。例の通り遅々とあるき出す。されど兎は固亀を侮て居る事をなれば。一向に遽もせず。うさぎ「吾はマア一睡して往くから。急で往なせへ。直に追越すよ」と云て微睡とする内に。亀の影が見なくなつた故。兎胆を消し。急に躍出して約束のところへ至て見れば。亀は先刻到着して。欠伸をして居たりけると遅緩なりとも弛ざるものは。急にして怠るものに勝つ[21]

足が速いという自身から，自らの優越感から怠けていると，コツコツと真面目に訓練しているものに超えられてしまう。そのコツコツと真面目に何事も努力する態度を勉強に対する姿勢に当てはめ,教授しているのである。

⑦　農夫の鸛を捕まえる話

明治二十三年十二月十七日の第一学年で実施された「農夫が鸛（こうのとり）を捕まえる話」では，「悪い友人と交友を持つべきではないこと」について出された話である。

　或農夫。蒔つけたる田を啄荒す鶴を捕らんと。罠を仕かけ。夕方になりて往て見れば。多くの鶴かゝりゐて。内に鸛の鳥一羽交り居たり。時に鸛哀れな声を出して。「私は鶴では御坐りませぬ。私は決して汝の御蒔なさつた穀物を喰はしませぬ。私は罪のない可憐な鸛の鳥で御坐ります。私は父にも母にもとんと苦労をかけぬ孝行もので御坐ります。どうぞおゆるし下さりませ。どうぞ御助け下さりませ」といへど。農夫は中なか承知せず。いよいよ首手を捕たのだから。汝も等輩と共に難儀をしなければならぬへ
友悪ければ其身正しといふとも人信ぜず[22]

この話では，悪事の片棒を担いでいなくても，一緒にいる場を見られると同様の悪事を働く人間に見られるので悪い行動をする友だちとは一緒にいないように説いている。

⑧　ワシントン

明治二十四年一月十九日の第一学年と，明治二十三年四月二十五日と十一月十四日の第二学年の授業で「過去を改めるために揮うことについて米国ワシントンの櫻について話す」という例話で多く使用されているものが、アメリカ大統領のジョージ・ワシントン(George Washington,1732-1799)の逸話である。子どものとき，父親に桜の木を切ったことを正直に打ち明けると，かえって誉められたという。
　このように，ワシントンの桜の木の話は事実かどうかは明らかではないが，子どもに過去を改めるために自分は何をすべきなのか，また真実を隠して嘘を突き通すのかについて考えさせることができる教材である。

⑨　マルチン

明治二十四年二月六日の第一学年で「孝友」のことについて，教授されている。
　マルティン・ルター (Martin Luther,1483-1546）は宗教改革の中心人物となり，プロテスタント教会の源流をつくった。当時,ラテン語で書かれている聖書を母国語であるドイツ語に翻訳した人物である。ルターは，神学問題を提起し，ローマ教皇への挑戦者とみなされ，周りから批判の目で見られていた。このとき，友人であったインゴルシュタット大学の教授であるヨハン・エックは彼の意見に対し，賛同するのではなく，彼を異端者として見たのである。仲のよかった二人は,この後,幾度となく激論を重ねるのであるが，結果，それまでのふたりの交友関係は絶たれてしまった。しかし,このとき彼を手助けした人物がいた。フードリヒ三世(Friedrich Ⅲ,1463-1525)である。フリードリヒ三世は，ヴァルトブルク城にルターを匿ったのである[23]。
　授業では，仲のよかった者同士でも意見の相違で

仲たがいをする場合もあるが，その反面にはその意見に賛同し，協力してくれる人物もいることを教えたと考えられる。

⑩ ヨング

ここで記述されているヨングとは,ブリガム・ヤング(Brigham Young ,1801-1877)という人物である。明治五年，ソルトレークに立ち寄った木戸孝允(1833-1877)が故郷に手紙を出している[24]。そのなかに「クレシテソト・ヨングなるもの」とブリガム・ヤングについて記述されている。ブリガム・ヤングは末日聖徒イエス・キリスト教会の第二代大管長であり，モルモンの歴史だけではなく，アメリカ歴史のなかでも最も影響を与えた人物である。彼は，モルモンが多妻制と呼ぶ一夫多妻制を信仰した。その原則を実践し，五十六人の子どもの父親になったと言われている[25]。

アメリカでは宗教の自由が掲げられているが，その半面で，アメリカ合衆国政府がこのモルモン教に対して危惧している。個人が宗教を信仰するにあたっては自由であるが，他人と弊害が生じてしまう危険性もあることを「難事」として教えたのではないだろうか。

⑪ 蜻蛉と蟻

明治二十四年三月六日の第一学年の授業で実施された「何事も勉強するべきであること」について例として「蜻蛉と蟻の話」が出されている。

夏もすぎ秋もたけ。稍冬枯の頃になりてある暖なる日。

蟻ども多く打あつまり。夏の日にとり収めたつ餌を日に晒とし。穴より引出し居たち。かかることろ にいと飢つかれたるきりゞす蟡跚来て。命をつなぐため。いささか其餌を分かち給はれと乞へり。

其時古老の蟻ふりかへり見て。「如何様御辺はきりゞすよな。汝は夏中何をして暮されしや。何故食に困るるや」と問ば。きちぎりす驕色に答て。

「此夏はおと面白こそありつれ。花に戯れ葉に眠り。口には露。身には羅衣。謡ひもしつ舞もしつ」と。いひもきらぬに蟻打笑ひ。「さらば合力は御無用なり。我等は夏の炎天に脊をさらして餌を運び。

冬枯の用意をなしたり。故に今日の安心あり。

永の夏中踏歌ひて徒に日を消りしものは。冬になりては飢べきはづなり。我は知ず」と答へけるとぞ(経)

夏に稼ぎし余徳は。冬になりて顕るるものじやぞ[26]。

この話もイソップ寓話では代表的な話である。児童に，蟻がコツコツと食物を収穫し，貯蔵する姿を学習面にたとえて教授している。

３．使用された例話の特徴

日本・中国・西洋に分類し例話の内容を見ていったが，例話には二種類の特徴がある。

一点目の特徴は，伝記教材の使用である。伝記教材は，児童の心情に深い感動を生じさせると同時に，児童の学習への向上心を喚起させるという教育的意図を含んでいる。教師は，伝記教材を使用することで授業内容に膨らみをもたせることができる。また，ひとつの項目に対し，単なることばのみで教授する方法よりも，特定の人物を模範的な行動例としてあげることで，児童の内面に問いかける説得力は増す。たとえば，子どもに「勉強しなさい。」という声かけをしても，聞き流されることがある。しかし,「お兄ちゃんのように」や「〇〇ちゃんのように」と最初につけられると，子どもは自分と比較して考えるようになる。

例話として，歴史上有名な人物や賢人を出すことで，児童は，その人物に対して尊敬や憧れの眼差しで見るようになり，さらに自分も模範しようとするのである。そこに例話を使用する教師の意図が隠されている。

二点目の特徴は，寓話教材の使用である。使用された例話を見ると，イソップ寓話のみが寓話教材である。イソップ寓話は，明治初期の修身教科書である福沢諭吉の『童蒙教草』に含まれ，日本の修身教育に導入された。

イソップ寓話が，修身教育に採用された理由には，寓話が持つ二種類の特徴が，修身教育に適切であると判断されたからであろう。

一点目は，擬人法を使用している点である。イソップ(Aesop,紀元前 619-紀元前 564)が擬人法を使用した目的は，イソップが生きていた紀元前六世紀前半頃の社会背景が影響している。この時代，社会を支配していた王や上層階級者に対して，低い身分であるイソップのような奴隷が,道理を説いて異を唱えることは不可能であった。そのため，その意見を動物に仮託する寓話が誕生したのである。擬人法は，このように直接意見を述べることができない階級のものが，間接的に話をするために誕生した技である。このような社会背景のもとで，擬人法は誕生したのだが，教育的な効果も持っている。その効果とは，身近な動物を擬人法で登場させることで，子どもの空想能力の向上や,興味関心の向上，そして理解を容易にするといったものである。

二点目は教訓を含めていることである。イソップは，

奴隷という自分の立場から体験した実践的道徳を説いている。経験を通して感じたことが，教訓として繁栄されているために，他人が聞いても共感できる内容となっている。しかし，ただ体験したというのではなく，さらにどのように対処すれば最善であるかと同時に，体験に対する反省が客観的に記述されている。イソップが体験したことが，擬人法を使用し離され，その話の趣旨が,教訓として表されている寓話が，日本の修身教育に活用できると判断され,採用されたのである。

学校教育のなかで採用された時期は，明治であるが，イソップ寓話が日本に入ってきたのは，それ以前の江戸時代である。イソップ寓話が日本に入ってきた経緯は次のとおりである。

天正十(1582)年天正遣欧使節の四人が，巡察使であったアレッサンドロ・ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano ,1539-1606）に伴われ九州を出発しローマへと向かった。八年間の長旅を経て，一行は天正十八（1590）年に帰国する。このさい，グーテンベルク式の活版字印刷機一式と活字の母体をポルトガルから携えてきた。印刷機を日本に持ち込んだ意図は，聖書・教義書・祈祷文などを新式の印刷技術によって印刷し,広く公布することで布教・伝教しようとしたのである。しかし，当時は豊臣秀吉によって出された宣教師追放令により，イエスズ会にとっては不利な情勢であった。それでも，天正十九（1591）年に加津佐の村に印刷機は備えられ,キリシタン版の刊行が実行された。その後，天草の印刷所は移動し，口語訳日本語ローマ字の『平家物語』(抄本)の印刷が始まり,翌文禄二（1593）年に『エソポのハブラス』が世に出たのである。それからのちに,慶長・元和の頃に成立・刊行され万字年間（1658-1660）には絵入製版本となって民衆に親しまれた『伊曽保物語[27]』が登場する[28]。『エソポのハブラス』と『伊曽保物語』が刊行された当時の日本は鎖国，禁教下という時代背景であったため，イソップ寓話は書承・口承によって,少しではあるが普及はした。

だが，もっとも日本国内にイソップ寓話が普及したのは，時代が変わった明治時代である。

明治五（1872）年,福沢諭吉は，イギリス人チェンバーズの“Moral Classbook”を訳し，『童蒙教草』を編集した。その『童蒙教草』のなかにイソップ物語が含まれている。しかし，江戸時代のように，キリスト教を普及する宣教師の日本語習得のためのテキストとしての役割ではなく,『童蒙教草』は，明治五年に公布された「学制」によって，文部省が始めて指定した修身教科書のひとつとして，使用された。

さらに，福沢諭吉以外にも,イソップ寓話を小学校教育の教科書に教材とし豊富に使用した人物がいる。その最大の功労者は，渡部温（1837-1898）である。渡部温は，明治初年の教育者・英学者・ジャーナリストである。明治に改元のあと，渡部は，津兵学校の英学教授方に就任し，そのさい，英語の教材として，“Thomas James: Aesop’s Fables”（New York, Grosset & Dunlap）を取り上げた。この教材を翻訳し，教科書を作ったのである[29]。それが『通俗伊蘇普物語』である。渡部が例言の冒頭に記述した文章はこのようである。

> 此度予が訳述せし此伊蘇普氏の寓言譬諭は。徳教を婦幼に説示す径捷にて。いかになる村童野婦といへども。其事理を解し易き事。恰も我が邦の落話に異らず。故に今其訳言をも容解を主旨として。原文の意に随つゝ。俗言倫理にて書取たり。願くは看官唯其説話の有益なると。意味の深憂なるとに注意して。猶又一層の分解を加へ。童蒙へ説諭せらるゝ事あらば。予が本懐是に過ず。若夫行文の拙悪と訳字の鄙陋とを論駁するものあらば。大の訳人の意に違へりとす[30]

渡部は，どんな子どもでも，イソップ寓話を聞くことで，教訓を容易に理解し，徳について考えることができると述べている。つまり，彼は，寓話教材の特性が持つ，擬人法や教訓が,修身教育に最適であると評価し，教育に導入していったのである。

このように，日本の歴史上の人物や中国の賢人といった伝記教材，そしてイソップの寓話教材という二種類の特徴をもった例話が，実際に学校現場では使用されていたのである。

４．例話を使用した意図

明治二十三年の瑞井尋常小学校で教授された例話について考察すると，教師は，あらかじめ,その日の授業の趣旨や目的を述べ，次に，その目的に見合った内容や例話を児童に提示し展開する授業をしていたと考えられる。授業例をあげてみると，あらかじめ児童に「何事も勉強するべきである」という趣旨を伝えてから,「蟻と蝉」の例話を使用し授業を実践したのであろうと,島﨑は『日誌』を読み解いていくなかから解釈した。「蟻と蝉」の例話から「何事も勉強するべきである」という内容を導き出すという授業形態ではないのである。このように，児童に先に例話を提示すると，例話から児童がとらえた趣旨は，一人ひとり異なり，授業の趣旨が，教師の意図とは違う方向に向いてしまう可能性がある。また，このように児童一人ひとりの考え方を重視し，個性をひきださせる授業形態は，現代の学校現場で重視されている授業方法である。明治期の学校教育では，児童の個性重視より，政府が意図する欧米に適応できる児童の育成が重視されている。そのためには.児童の個性より，画一的に内

容を教授する方法が最適であると考えられていた。そのため，先に授業の趣旨を提示し，その趣旨に適応した例話を使用し，展開していく授業が実施されていたと考えられる。あらかじめ主旨や教訓を提示し教える方法からは，おとなが理想とする子ども像に，児童を導くという意図が感じられる。つまり，例話は，教授内容の趣旨を明確にするひとつの手段として用いられていたのである。

修身教育で使用されている例話は，教科書の編纂と時代の流れに伴い，例話を使用する意図に変化が見られてくる。とくに，国定教科書編纂での教材選出については，激しい議論の的となった。検定教科書時代には，尋常小学校の第一・第二学年の児童に適する歴史的例話は少なかった。そこでは，国定教科書編纂のさいに上がった議題に，仮設話[31]を用いて忠実話に代えるというものがある。しかし，仮設話にも，童話寓話のような昔話のものと，まったく新しく作製する仮設物語の二種類がある。国定教科書を編纂する委員のなかには，熱心に寓話の教育的価値を主張する論と，極端に寓話を排斥しようとする論が存在した[32]。後者の理由は，童話や寓話自身が虚偽であり，正直や真実を力説する修身のなかで，このような虚偽を使用し教授することに抵抗を感じたのである。このような，子どもには真実を教授すべきであるという意見を持ち，寓話を批判した人物がいる。J・J・ルソー（Jean-Jacques Rousseau ,1712-1778）である。寓話が，子どもたちを面白がらせると同時に，だましていることを考えず，むしろ寓話が子どもの道徳学だと叫ぶことは遺憾である。また，寓話はおとなの教訓にはなるが，子どもには事実をあからさまに伝えるべきである。さらに，習わされる寓話の意味がわかる子どもはひとりもいないと述べている。そして，たとえとして，「蟻と蝉」の話を登場させている。蝉の屈辱が子どもにとっての教戒の資となると考えるのは，寓話作者やこれを応用するおとなの独断であるかもしれないと記している。またルソーによれば，子どもは蟻の役割を選びたがるであろう，それが自然の選択なのだ,とも言っている。蟻は強者の立場を十分に享受して蝉を追放し，そのうえ嘲笑する。蟻のほうが「恰好が良い」と言うかもしれない[33]。しかし，この蟻の冷酷さに子どもが自然と共感するとすれば，有害な寓話であるとルソーは批判しているのである。ルソーが，子どもに教授する内容や生きていく教訓を架空の世界に置き換えて，教授する方法を批判している背景には，ルソーの幼少期が影響しているのではないだろうか。ルソーは自身が誕生したさいに，母親を亡くし，さらにすぐに奉公に出されるという幼少期を迎えている。幼いルソーは，ただその現実を受け入れるしかなかったのだろう。彼の経験が，寓話を批判する考えに一部影響を与えているのではないだろうか。

明治期にも,ルソーと同じく，現実を脚色して，子どもに与えていることを批判する意見があった。しかし，第一回目の国定教科書編纂で出された結論は，主として教材に応じた仮設物語を使用する方向だった。当時は，ヘルバルト学派の人物中心主義が広がっており，人物の伝記によって多くの徳目を教えることが流行していたため，同一人物に数個の徳目を配列することを原則とし，編纂を行ったのである[34]。

５．まとめ

上記で述べたように，伝記教材や寓話教材は，修身・道徳を教授するさいに賛否が分かれる内容である。ルソーのように，寓話を批判し，子どもには現実を見せ，対応できる能力を育成するのか，また逆に，多くの例話に親しませ，そこから子どもに考えさせていくべきなのかという議論は,修身・道徳教育にとって切っても切り離せないものである。

ルソーの言うとおり，寓話教材は，人が体験してきたことを脚色し，真偽を曲げている可能性があり，さらに，おとなの都合のいいように作りあげられている部分がある。その作られた寓話を子どもに教えることは，おとなの考える子ども像に導いてしまう可能性も秘めている。だが，逆に，現実のみで子どもに教授していると，子どもの考え方は理論的で現実的にはなるが，想像性や多様性が生まれなくなってしまう危険性も秘めている。本研究では,寓話を使用するのか，もしくは現実をありのままに受け入れさせるのかという議論について賛否はしない。

明治二十三年に実施された瑞井尋常小学校の第一・第二学年の修身教育では，松平好房のような伝記教材と，イソップ寓話のような寓話教材について,日本・中国・西洋の区別することなく，さまざまな話を使用していることが明らかとなった。また，現実社会で適応させるべき内容や作法については，社会に適応する内容として，ありのままに教授している。家庭に帰ると，農作業や家庭内の手伝いをするという生活を送っている児童は，寓話や伝記に触れる機会は学校の教育でしかなかった。そのため，教師は児童の想像力を向上させ，さらに現実から逃避でき，想像の世界に浸り，楽しめることが可能な内容を，教師は意図的に選出していたのであろう。

そのため，瑞井尋常小学校では，例話を用いることに対し，伝記教材や寓話教材も，現実的な作法と同様に，児童の修身教育にとって重要であり，さらに効果的な教材であると考えていたのであろう。

本研究の今後の課題は，三点ある。一点目は，明確にできなかった例話の調査を,明確にすることである。二点

目は，瑞井尋常小学校が使用していた教科書の特定である。三点目は，教育勅語が公布されてからのちの，明治二十四年四月以降の修身教育内容が書かれた史料を探し，勅語の影響を受けた修身内容と比較していていくことである。

—注—

1 以下「日誌」とする。
この史料は武庫川女子大学の資料館に所蔵されていたものである。
2 春分・秋分に近い戌の日に行われる。春は春社といい，地神を祀って豊作を祈り，秋は秋社といい,収穫を感謝する祭りである。
3 禅文化研究所『禅門逸話選下』禅文化研究所, 2000, pp. 80
4 田尻祐一朗著『山崎闇斎の世界』ぺりかん社, 2006
5 Wikipedia「与話情浮名横櫛」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8E%E8%A9%B1%E6%83%85%E6%B5%AE%E5%90%8D%E6%A8%AA%E6%AB%9B。2008 年 5 月 3 日参照。
6 鈴木正三著,鈴木鉄心校訂・編『鈴木正三道人全集』山喜房仏書林, 1981
神谷満雄著『鈴木正三の生涯と思想』鈴木正三没後 350 年記念事業実行委員会,2005
7 逸話研究会編『江戸逸話事典』新人物往来社, 1989
8 小尾郊一「中国の詩人 6『李白』」集英社, 1983
9 藤井専英「新釈漢文大系第 5 巻『荀子(上)』」明治書院, 1972, pp. 42-43
10 同上, pp. 7-8
11 中島敦『山月記・李陵』集英社, 1993, pp. 54-102
12 金谷治著『孟子』岩波新書, 1966, pp. 21-22
13 同上, pp. 20-21
14 諸橋轍次・原田種成『宋名臣言行録』明治出版, 1984, pp. 107-108
15 Wikipedia 「孫叔敖」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%AB%E5%8F%94%E6%95%96。2008 年 8 月 13 日参照。
16 渡辺温訳　谷川恵一解説『通俗伊蘇普物語』平凡社, 2001, pp. 51-54
17 中務哲郎訳『イソップ寓話』岩波文庫, 2004, pp. 328
18 高橋博著『アルフレッド大王～英国知識人の原像』朝日新聞社, 1993
19 渡辺温訳　谷川恵一解説『通俗伊蘇普物語』平凡社, 2001, pp. 148
20 同上, pp. 54
21 同上, pp. 50
22 同上, pp. 75-78
23 オリヴィエ・クリスタン著,木村惠一訳『宗教改革ルター, カルヴァンとプロテスタントたち』創元社, 1998, pp. 37-67
24 木戸孝允が明治五年正月十一日に岩倉使節団として，ソルトレークから三浦梧楼宛に書いた手紙のなかに「実に此宗之奇なる一夫多妻を娶り，プレジデント・ヨングなるものは当年七十余歳にて十八人之妻，六十余人之子あり。実に開化之国と雖も様々の弊あり。」とモルモン教について書いた文章の一部である。
25 高橋弘『素顔のモルモン教　アメリカ西部の宗教－その成立と展開』新教出版社, 1996
26 渡辺温訳　谷川恵一解説『通俗伊蘇普物語』平凡社, 2001, pp. 30
27 現在の研究では，この『伊曽保物語』の編纂意図や発案者を推定する手がかりがなく，解明されていない。
28 小堀桂一郎『イソップ寓話』講談社, 2001 , pp. 169-183
29 同上, pp. 260-261
30 渡部温訳 谷川恵一解説『通俗伊蘇普物語』平凡社, 2001, pp. 23
31 仮設話とは，政府が作りだした話であろう。『教科書の歴史』のなかには仮設話の詳細な例話が登場しておらず，具体的にどのような話を仮設話と称したのか不明である。しかし，国定修身教科書には，「イチロー」や「オウメ」などの仮設人物が登場する話があるため，このような話を指し示すために，仮設話ということばを用いた可能性はある。
32 唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社, 1956, pp. 221
33 J･J･ルソー著　永杉喜輔･宮本文好･押村襄訳『エミール(全訳)』玉川大学出版部, 1984, pp. 106
34 唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社, 1956 , pp. 221

—参考文献—

(1) 海後宗臣著・仲新著・寺崎昌男著『教科書でみる近代日本の教育』東京書籍, 1999
(2) 片山清一『資料・教育勅語—煥発時および関連諸資料—』高陵社書店, 1974
(3) 唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社, 1956
(4) 小池松次『修身の教科書』サンマーク出版, 2005
(5) 佐藤幸治『文化としての暦』創言社, 1998
(6) 武安宥『アレテーとパイデイア』福村出版株式会社, 1997
(7) 武安宥『道徳教育』福村出版株式会社, 1991
(8) 兵庫県教育史編集委員会編『兵庫県教育史』兵庫県教育委員会, 1963
(9) 文科省編『学制百年史･記述編』帝国地方行政会, 1972
(10) 文科省編『学制百年史・資料編』帝国地方行政会, 1972